

川崎病に対する免疫グロブリン療法
100mg/kg/日連日5日間投与と400mg/kg/日
連日5日間投与の比較(中間報告)
(分担研究:川崎病の治療法に関する研究)

原田研介¹⁾, 山口英夫¹⁾, 宇佐美等¹⁾, 柳川 洋²⁾, 菌部友良³⁾, 川崎富作³⁾

要約 川崎病に対する免疫グロブリンの有効性と投与量の検討を行う目的で, 400mg/kg/日連日5日間投与と, 100mg/kg/日連日5日間投与との比較を行っている。これはその中間報告である。

発熱期間は, 400mg/kg/日連日5日投与群の方が有意に短かった。

冠動脈障害の発生に関しては有意差としては明らかではないが, 傾向として, 400mg/kg/日連日投与群の方が少ないように思われた。

見出し語: 川崎病, 免疫グロブリン療法

研究目的 (1) 1984年古庄らにより免疫グロブリン療法が, 川崎病の冠動脈病変の発生頻度を低下させるとの報告がなされた。この事実の追試を目的として, この研究班では昭和58年10月から昭和61年3月31日の間に川崎病に対する免疫グロブリンの少量療法についての検討を行った。その結果, 完全分子型免疫グロブリン100mg/kg/日連日5日間投与はアスピリン単独治療に比較して, 冠動脈障害の発生頻度を低下させるということが明らかとなった。

この研究は, 免疫グロブリン大量療法(完全分子型免疫グロブリン400mg/kg/日連日5日間投与)と, 100mg/kg/日連日5日間投与との間に冠動脈障害に関して差があるかどうかを見ることを目的として行った。

研究方法 この研究に参加したのは, 川崎病の治療法に関する研究班々員の属する計15設である。⁽²⁾ 研究の実施計画は過去に報告したとうりである。

結果 昭和62年2月1日から昭和63年9月30日までの8カ月間に147例の症例が集められた。症例の男女数, 年齢, 治療開始病日, および免疫グロブリン使用量に対する症例数を表1に示す。

有熱期間, 及び免疫グロブリン投与開始後解熱するまでの日数を表2に示す。100mg/kg/日連日5日間投与に比べて, 400mg/kg/日5日間連日投与の方が有熱期間, 投与後解熱日数ともに有意に短かった。

冠動脈障害の発生率を表3に示す。最大拡大時, 30病日, 60病日において, それぞれ, ほとんど差を認めていないが, 400mg/kg/日連日5

1) 日本大学小児科

2) 自治医大公衆衛生

3) 日赤医療センター小児科

表 1

川崎病に対する免疫グロブリン療法 一用法用量の検討一

用法用量	症 例 数 (男:女)	月 齢 (平均)					治療開始日 (平均)								
		~5	6-11	12-23	24-47	48~	2	3	4	5	6	7			
100 mg/kg 5 日	76 (47:29)	11	15	16	28	6	1	5	18	24	19	9			
		(22.6±15.2)					(5.1±1.2)								
400 mg/kg 5 日	71 (35:36)	9	15	26	17	4	1	5	12	22	19	12			
		(19.3±13.4)					(5.3±1.2)								
計	147 (82:65)	20	30	42	45	10	2	10	30	46	38	21			
		(21.0±14.4)					(5.2±1.2)								

表 2

川崎病に対する免疫グロブリン療法 一用法用量の検討一

発熱に対する作用

用法用量	有 熱 期 間 (平均)					投与後解熱日数 (平均)						
	~5	6~7	8~10	11~15	16~	~1	2	3	4	5	6~9	10~
100 mg/kg 5 日 (76)	8	28	17	15	7	12	8	12	11	10	9	12
	(9.5±5.0)					(5.5±5.1)						
400 mg/kg 5 日 (71)	18	28	16	5	3	25	14	10	7	6	4	4
	(7.4±3.2**)					(3.1±3.0**)						

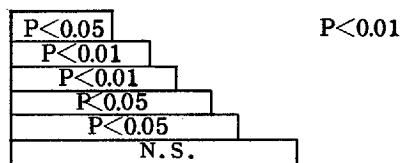
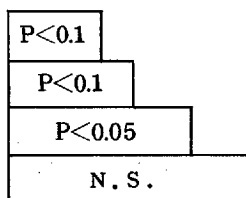
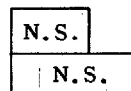
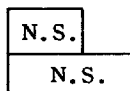
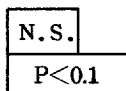
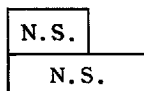


表 3

川崎病に対する免疫グロブリン療法 一用法用量の検討一

冠動脈障害の発生率

用法用量	入 院 時			最大拡大時			30 病 日			60 病 日		
	正常	拡大	瘤	正常	拡大	瘤	正常	拡大	瘤	正常	拡大	瘤
100 mg/kg 5 日 76例	74 (97.4)	4 (2.6)	0	60 (78.9)	9 (11.8)	7 (9.2)	65 (85.5)	5 (6.6)	6 (7.9)	67 (88.2)	3 (3.9)	6 (7.9)
400 mg/kg 5 日 71例	70 (98.6)	1 (1.4)	0	64 (90.1)	7 (9.9)	0	67 (94.4)	4 (5.6)	0	68 (95.8)	3 (4.2)	0



日間投与群においては、まったく瘤の出現を見ないのが特徴である。

入院時に冠動脈障害を認めたものを除いた場合つまり入院時に冠動脈が正常であったものだけに

限定した場合、(表4)これも最大拡大時、30病日、60病日ともに有意の差を認めていないが、400mg/kg/日5日間連日投与群においては瘤の出現が認められなかった。

表4 川崎病に対する免疫グロブリン療法 — 用法用量の検討 —
冠動脈障害の発生率 (入院時に正常例のみ)

用法用量	最大拡大時			30 病 日			60 病 日		
	正常	拡大	瘤	正常	拡大	瘤	正常	拡大	瘤
100mg/kg 5日 74例	60 (81.1)	8 (10.8)	6 (8.1)	65 (87.8)	4 (5.4)	5 (6.8)	66 (89.2)	3 (4.1)	5 (6.8)
400mg/kg 5日 70例	64 (91.4)	6 (8.6)	0	67 (95.7)	3 (4.3)	0	68 (97.1)	2 (2.9)	8

N.S.
N.S.

N.S.
N.S.

N.S.
N.S.

考察 先の本研究班による川崎病に対する免疫グロブリン投与研究により、100mg/kg/日5日間連日投与が、アスピリン単独投与よりも有意に冠動脈障害の発生数を低下させるという成績が得られた。その結果に基づき、この研究は400mg/kg/日連日5日間投与と、100mg/kg/日連日5日間投与との間に差があるかどうかを見るために行われているものである。

現在は、まだ研究の途中であり最終的な結論を述べることはできないが、有熱期間は400mg/kg/日5日間連日投与群において短かく、また、冠動脈瘤の発生も少ない傾向が見られることから、100mg/kg/日連日5日間投与と比較して、400mg/kg/日連日5日間投与の方が有効であるという傾向が見られると言えるであろう。更に症例を集積して検討するつもりである。

参加施設名及び班員名

北大	長谷直樹
山形大	佐藤哲雄
日赤医療センター	藺部友良
聖マリアンナ大	山田兼雄
東京女子医大第二病院	多田羅勝義
日大	原田研介
都立墨東病院	関一郎
愛知医大	尾内善四郎
名大	長嶋正実
金沢医大	浅井利夫
明和病院	播磨良一
広島市民病院	岡崎富男
松山日赤病院	西林洋平
県立宮崎病院	佐藤雄一
その他、埼玉医大小児科の協力を得ました。	
感謝致します。	

文 献

(1) Furusho K, et. al.: High-dose
intravenous gamma globulin for
Kawasaki disease. Lancet II: 1054, 1984

(2) 原田研介
川崎病の治療に関する研究, 厚生省心身障害研究,
川崎病に関する研究, 昭和61年度研究報告書, P101.

Abstract

Intravenous gamma globulin therapy in Kawasaki disease

A comparison between high dose and low dose
intravenous gamma globulin

—Preliminary report—

Kensuke Harada

Hideo Yamaguchi

Hitoshi Usami

Hitoshi Yanagawa

Tomoyoshi Sonobe

Tomisaku Kawasaki

From Feb. 1987, a comparison study between high dose (400mg/kg/day for 5 day) and low dose (100mg/kg/day for 5 day) gamma globulin therapy for Kawasaki disease is going on. By Sept. 1987, 147 cases are collected.

Fever fell earlier in 400mg/kg/day group, as compared with 100mg/kg/day group.

The prevalence of coronary abnormality seems less in 400mg/kg/day group.



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約 川崎病に対する免疫グロブリンの有効性と投与量の検討を行う目的で、400 mg/kg/日連日5日間投与と、100mg/kg/日連日5日間投与との比較を行っている。これはその中間報告である。

発熱期間は、400 mg/kg/日連日5日投与群の方が有意に短かった。

冠動脈障害の発生に関しては有意差としては明らかではないが、傾向として、400 mg/kg/日連日投与群の方が少ないように思われた。